

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320157

研究課題名(和文) 近現代ヨーロッパにおける文化衝突と自他認識 記憶・記録・史料

研究課題名(英文) Cultural conflict and self-other perception in modern European history: memory, record, archives

研究代表者

近藤 和彦 (Kondo, Kazuhiko)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：90011387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,000,000円、(間接経費) 4,500,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、近現代ヨーロッパ人の文化衝突にともなう認識と自他アイデンティティ構築の過程を、記憶、記録、史料に焦点をあわせ総合的に明らかにする。ヨーロッパにおける知の形成・展開を内部発生的な系譜論とみるのではなく、他者との接触と交渉により既知のものを準拠枠としつつ新しい知を構築してゆく局面、普遍性、公共性への意志に注目する。現今の地域史・政治史・社会史・思想史・文化史等々への細分化をこえて、21世紀の人文科学に展望をえたいと考えた。

3年間を終えて、知的刺激にみち、有益な共同研究であったが、成果の公表はまだ中途と言える。メンバーの今後の論文、図書、アウトリーチ活動等に期待していただきたい。

研究成果の概要(英文)：The project has focused on the historical aspect of modern European perception and construction of self-other identity, with special reference to memory, record and archives. Made up of twelve historians in the front-line, it has tried to emphasize not the endogenous genealogy of knowledge but the encounter and exchanges with 'the other' and the eventual building up of encyclopedic knowledge and wisdom based upon the humanist and enlightenment sources. Historical and intellectual will to generality and publicness was significant. The project members have wished to overcome the intellectual compartmentalization to date and to acquire a good perspective for the humanities of the twenty-first century.

The project has been an inspiring and profitable experience, but three years are not sufficient to finish our good products. Some years to come will see not only our academic articles and books but also outreach activities to the public.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史 世界史 異文化 自他認識 史料

1. 研究開始当初の背景

(1) 近現代の歴史学は、史料批判と学問的蓄積の方法を確立しつつ、「国民的なもの」「近代的なもの」「社会主義」の発生と系譜を心柱とする大きな物語を構築してきた。こうした発生史・系譜論は 20 世紀後半からの世界の展開、グローバル化、複雑系科学や認識論によって、輝きを失った。今日の歴史学は根本的に組み直す必要がある。また、情報のデジタル化とインターネットという知の革命が展開中であり、これにたいする積極的な対応も求められている。

(2) ヨーロッパ文明は、歴史的に「異邦」から新しいものを獲得し、理解の体系を構築してきた。また(地理的に内部に存在するものも含めて)異物・周縁的な存在を問題意識化し、統治し制御しようとしてきた。文化衝突と自他認識をめぐる歴史証言として、近世イエズス会の報告書、18 世紀フランスの百科全書、19 世紀イギリスの議会文書、20 世紀の地球物理学など、そして各地の博物館や文書館に収められた文物、その展示法もある。これらを分析的に、経験的に、また実践と変化の相において考察する必要がある。

2. 研究の目的

(1) この研究は、近現代ヨーロッパ人の対他文化衝突にともなう認識とアイデンティティ構築の過程を、記憶、記録、史料のありかたに焦点をあわせて総合的に明らかにする。その特徴は、近現代ヨーロッパにおける知の形成・展開を、内部発生的な系譜論としてみるのではなく、他者との接触と交渉によって異質なものを学び摂取し、旧来の世界観と知のシステムを編成替えしてゆくものとみなす。既知のものを準拠枠としつつあらたな知を構築する局面にこそ、ヨーロッパ文明の強靱さが見てとれる。普遍性ないし公共性への意志とも言えるであろう。

(2) 最新のリサーチと議論にもとづき、広域ヨーロッパにおける文化衝突と自他認識、その生産・再生産を明らかにする研究である。歴史学の方法、史料論としても、政治史・社会史・思想史・文化史等々の細分化をこえて、21 世紀の人文学のありかたに展望をえたい。

3. 研究の方法

(1) 共同研究、近藤和彦(編)『歴史的ヨーロッパの政治社会』(山川出版社、2008)は政治社会を共通概念として、歴史的な場における自他認識とアイデンティティ構築を分析する試論集であった。日本史・東洋史の共同研究『「帝国」日本の学知』計 8 巻(岩波書店、2006)は近代日本のアジア経験における実践的な知と学問をあつかい、研究史の一つの画期をなす。2009 年 9 月の国際歴史学会議(CISH)および日英歴史家会議(AJC)において、地域は異にしながらも、学問の問題意識における同時代的並行として確認された点である。

(2) 本研究は、上のような学界の共有資産を積極的に継承し、蓄積されてきた特殊研究から学ぶものである。その遂行のために、これまでの研究蓄積について周到に整理し、分析し、討論することが必要である。早くは修正派によって 1980 年前後から試行され、蓄積されてきた研究の視角と方法についての吟味は欠かせない。データベース・史料・研究文献の批判的な再吟味と分析をすすめ、また研究会をくりかえして相互の討論と共通理解を深め、欧米への研究調査旅行を積極的にこなす。

(3) 研究組織に属して常時プロジェクトに参加するメンバー 12 名にくわえて、必要に応じて関連テーマの専門家、海外の研究者にも協力をお願いする。研究の成果を学術的な出版や研究集会での発表によって公にし、国際的にも貢献する。

(4) アウトリーチ活動として、ウェブサイト、教科書、教育的メディアへの執筆などの方法で、研究成果を公共的な資産として共有できるようにする。

4. 研究成果

(1) この研究における問題はヨーロッパ文明と他の世界との交渉に鮮やかに示されるが、またヨーロッパ内、国内の他者・異質要素の統合、処理もテーマとなる。ヨーロッパ内でのイギリスとアイルランド、フランスとドイツ、東欧とロシア等、それぞれの関係性自体がイシューとなってきた場合もある。以下、5 に挙げる「主な発表論文等」との関係に触れながら記す。代表者・近藤和彦は、全メンバーを総括するとともに、歴史的な政治社会の方法論、広義のイギリス人の自他認識、史料論と取り組んできた。雑誌論文の、学会発表の、図書の、等があり、さらに多くのアウトリーチ活動を実施した。坂下史の監訳出版、図書の もそうした営みの一つである。

(2) 自他認識といった場合、まずは遠方の異文化がどう受けとめられたかが問題になる。図書 にみえるように、那須敬は宗教意識に注目し、野蛮とされた非ヨーロッパ人の神概念、キリスト教以前のヨーロッパの土着信仰を知った 17 世紀人の当面したアイデンティティ問題をあつかう。図書の編著を刊行した金澤周作は、海の世界史といった論点から安全航行、海事裁判所、国際法、そして保険制度などの整備にあたって国際交渉や世界史認識がうながされた過程を具体的に考察した。また後藤春美は、雑誌論文、図書などで 20 世紀の国際関係におけるアヘン問題に注目し、大日本帝国とイギリス帝国の相克した東南アジアにおけるアヘン使用が政治性をおびる側面を分析した。

(3) 目の前の他者、あるいは異様とされたものの認知も重要である。坂下史は、学会発表、で 19 世紀初めのイギリスにおける新救貧法が制定される前に実施された、ヨー

ロップ各国の救貧・慈善についての大規模な調査の記録を、イギリス人の貧困観、外国認識の証言として分析している。国民国家と言語・教育をあつかうのは西山暁義で、論文、学会発表においてアルザスの言語教育を対象とし、ここに視察団を派遣していた19世紀末・20世紀初めの日本をふくむ諸国の記録を考察する。安村直己は論文、図書で、スペイン帝国における異文化交渉をつうじてスペイン人アイデンティティが確立されたあと、これが変容する過程、そして先住民集団および混血層のアイデンティティ政治を明らかにする。篠原琢は図書で、19世紀のオーストリア帝国秩序と複数の市民的公共圏とのあいだの相克を考察し、自他の歴史認識の形成と制度化を分析した。

(4) 對他とは一つではなく複数の契機が絡みあう状況である。姫岡とし子は論文、学会発表で人種、社会主義、フェミニズムといった複数の對他者関係が交錯しながらナショナル・アイデンティティが構築され、政治化してゆく過程を考察している。勝田俊輔は論文でアイルランドの人口移動とダブリンの都市と宗派の交錯する問題をあつかっている。

流行のグローバル化論の延伸でなく、文化遭遇と他者認識を通じての新しい政治の形成という論点は全メンバーにも共有されているが、とりわけ池田嘉郎は19・20世紀のロシア・ソ連、そして第一次世界大戦を対象とするので議論はきわだつ。論文、図書によれば、ヨーロッパの周縁、ユーラシアの中央に位置したロシアは、その複合性・多民族性ゆえに変容も迫られてきたが、構築されたソ連・ロシアの政治は、やがて逆にヨーロッパに還流して衝撃を与えることになる。

(5) 中国近現代史を専門とする吉澤誠一郎は、論文、学会発表、図書において、ヨーロッパの外交官、商人、宣教師たちの蓄積した中国の社会文化をめぐる知識、さらに中国人の形成したヨーロッパ像のあいだの連関とズレ自体に、文明史的な考察をくわえる。また帝国という概念、租界という独特の空間の世界史的な意味は全メンバーのテーマであり、2013年9月の上海・天津・北京における実踏旅行として実現した。こうした交渉の場における自他認識をつうじて構築された記録システム、建築、および学知のありかたも、わたしたちの研究の射程内にある。

以上の研究にあたって、学問的親交のある欧米人歴史家のうち、とくに Martin Daunton, Joanna Innes, Anthony Jenkins, Patrick O'Brien, Miles Taylor といった方々にも協力していただいた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 20件)

近藤 和彦「註釈『イギリス史 10 講』(上) - または柴田史学との対話」、『立正大学大学院紀要・文学研究科』30号(2014)71-87. 査読有

近藤 和彦「礫岩政体と普遍君主：覚書」、『立正史学』113号(2013)25-41. 依頼

姫岡 とし子「ドイツにおけるナショナリズムと女性の政治化」、『メトロポリタン史学』9号(2013)51-73. 依頼

姫岡 とし子「ドイツにおけるホロコーストの記憶文化と性」、『歴史と地理』654号(2012)1-15. 依頼

Shunsuke KATSUTA, The proposal for a militia interchange between Great Britain and Ireland, *Irish Sword*, vol. 29, no.116(2013)139-150. 査読有

Shunsuke KATSUTA, Conciliation, anti-Orange politics and the sectarian scare: Dublin politics of the early 1820s, *Dublin Historical Record*, vol. 64, no.2(2012)142-159. 査読無

後藤 春美「国際連合麻薬委員会設立をめぐるイギリス外交」、『国際政治』173号(2013)127-140. 査読有

池田 嘉郎「『社会運動史』覚書き」、『史苑』74巻1号(2014)59-72. 依頼

池田 嘉郎「ロシア史研究の中の戦後歴史学 和田春樹と田中陽児の仕事を中心に」、『史潮』新73号(2013)39-59. 依頼

西山 暁義「ヨーロッパ国境地域における歴史意識と博物館 アルザス・モーゼル記念館の事例」、『共立女子大学総合文化研究所紀要』20号(2014)83-121. 査読無

西山 暁義「二国間教科書の可能性と限界 独仏共通歴史教科書の事例から」、『歴史学研究』899(2012)52-59. 査読有

安村 直己「植民地支配・共同性・ジェンダー：18世紀メキシコの訴訟文書めぐって(特集 史料の力、歴史家をかこむ磁場 史料読解の認識構造)」、『歴史学研究』912号(2013)2-13. 依頼

吉澤 誠一郎「ネメシス号の世界史」、『パブリック・ヒストリー』10号(2013)1-13. 依頼

吉澤 誠一郎「五四運動から読み解く現代中国 ラナ・ミッター『五四運動の残響』を手がかりに」、『思想』1061号(2012)147-159. 依頼

[学会発表](計 10件)

Kazuhiko KONDO, 'Moral economy' retried in digital archives, *The Global E. P. Thompson Conference*, October 5, 2013, Harvard University.

近藤 和彦「本国上更紗と世界資本主義」、立正史学会大会、2012年10月27日、立正大学。

姫岡 とし子「ジェンダー史の成果は浸透したのか？」日本学術会議シンポジウム、2013年6月29日。

Toshiko HIMEOKA, Frauenbewegung und Backlash: Japan und Deutschland im Vergleich, *Frauenbewegungen und Komplexe* (Geschlechterverhältnisse in Internationaler Perspektive) *Festtagung für Ilse Lenz*, 2013年2月23日、ポーフム・ルール大学。

Chikashi SAKASHITA, Endowed charities and the changing ideas of public good in the English town, c.1750-1840, *7th Anglo-Japanese Conference of Historians: History in British History*, 13 September 2012, Trinity Hall, University of Cambridge.

坂下 史「名誉革命史と「言論空間」の位置」日本英文学会第84回大会(招待講演)2012年5月26日、専修大学。

Akiyoshi NISHIYAMA, Erziehung statt Erziehungsstaat? Die Reform des Schulwesens der Stadt Strasburg vor 1914, *Tagung Kommunalen Liberalismus in Europa*, veranstaltet von der Hugo-Preus-Stiftung, 1-2 Juni 2012, Potsdam.

Seiichiro YOSHIZAWA, Chinese nationalism and the concept of empire in the twentieth century, *7th Anglo-Japanese Conference of Historians*, 12 September 2012, Trinity Hall, University of Cambridge.

〔図書〕(計 15件)

近藤 和彦 『イギリス史 10 講』(岩波書店、2013) 全 320pp.

喜安 朗、近藤 和彦ほか 『歴史として、記憶として』(御茶の水書房、2013) 176 - 182 執筆。

ポール・ラングフォード編、坂下 史監訳 『オックスフォード・ブリテン諸島の歴史 - 18 世紀: 1688-1815 年』(慶応大学出版会、2013) 全 352pp.

細谷 雄一編、後藤 春美 『グローバル・ガバナンスと日本』(中央公論新社、2013) 全 304pp.

池田 嘉郎編著 『第一次世界大戦と帝国の遺産』(山川出版社、2014) 全 296pp.

中嶋 毅編、池田 嘉郎 『新史料で読むロシア史』(山川出版社、2013) 128-145 執筆。

金澤 周作編著 『海のイギリス史 闘争と共生の世界史』(昭和堂、2013) 全 376pp.

篠原 琢・中澤達哉編 『ハプスブルク帝国 政治文化史 継承される正統性』(昭和堂、2012) 全 256pp.

岩井淳編、那須 敬 『複合国家イギリスの宗教と社会』(ミネルヴァ書房、2012) 53 - 81 執筆。

青山学院大学総合研究所、安村 直己 『近代国家の形成とエスニシティ』(勁草書房、2014) 267 - 298 執筆。

吉澤 誠一郎編著 『歴史からみる中国』(放送大学教育振興会、2013) 全 240pp.

岡本 隆司・吉澤 誠一郎編 『近代中国研究入門』(東京大学出版会、2012) 25 - 55 執筆。

〔その他〕

アウトリーチ活動

近藤 和彦 「読書アンケート」、『みすず』601号(2012)、612号(2013)、623号(2014)に執筆。

岩波書店辞典編集部編 『岩波世界人名大辞典』上下(岩波書店、2013) 全 3586pp. イギリス近現代史関連で近藤 和彦、勝田 俊輔、計 502 項目執筆。

羽場 久美子編、姫岡 とし子 『EU (欧州連合) を知るための 64 章』(明石書店、2013) 349 - 352.

岸本 美緒、勝田 俊輔 『新世界史』(山川出版社、2014) 高等学校教科書・世界史 B.

近藤 和彦、池田 嘉郎 『世界の歴史』(山川出版社、2013) 高等学校教科書・世界史 A.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 和彦 (KONDO Kazuhiko)

立正大学・文学部・教授

研究者番号: 90011387

(2) 研究分担者

姫岡 とし子 (HIMEOKA Toshiko)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号: 80206581

勝田 俊輔 (KATSUTA Shunsuke)

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号: 00313180

坂下 史 (SAKASHITA Chikashi)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号: 90326132

(3) 連携研究者

後藤 春美 (GOTO Harumi)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号: 00282492

池田 嘉郎 (IKEDA Yoshiro)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号： 80449420

金澤 周作 (KANAZAWA Shusaku)
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号： 70337757

篠原 琢 (SHINOHARA Taku)
東京外国語大学・総合国際学研究院・教授
研究者番号： 20251564

那須 敬 (NASU Kei)
国際基督教大学・教養学部・准教授
研究者番号： 40338281

西山 暁義 (NISHIYAMA Akiyoshi)
共立女子大学・国際学部・准教授
研究者番号： 80348606

安村 直己 (YASUMURA Naoki)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号： 30239777

吉澤 誠一郎 (YOSHIZAWA Seiichiro)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号： 80272615

(4) 研究協力者

時宜的に Martin DAUNTON (Cambridge),
Joanna INNES (Oxford), Anthony JENKINS,
Patrick O' BRIEN (LSE), Miles TAYLOR
(London) にも協力をあおぎ有益な討論を
おこなった。